

# 高 校 生 の 生 と 性

## 実践の構図を探る

柴 田 順 三

### 1 はじめに

高校生の人間的な自立や人格の形成にとって、「性」は避けてとおることのできない問題である。

1999 年に実施された「第五回 青少年の性行動全国調査報告」<sup>(注1)</sup>によれば、「性的なことに関心を持ったことのある」高校生は、男子で 90.5%，女子で 76.9%，「性的な興奮を感じたことがある」高校生は、男子で 86.1%，女子で 41.5%，「マスターベーションの経験がある」高校生は、男子で 86.1%，女子で 19.5%，「デートしたことがある」高校生は男子で 50.4%，女子で 55.4%，「性的な意味あいでのキスの経験がある」高校生は男子で 41.1%，女子で 42.9%，「性交の経験がある」高校生は男子で 26.5%，女子で 23.7% などとなっている。高校生の約 4 分の 1 が性交体験を持っているのである。

これらの数値を多いと見るか少ないと見るかは見解の分かれるところかもしれない。しかし、いずれにしても、これらの数値は圧倒的に多くの生徒にとって「性」が日常生活で避けてとおることのできない問題になっていることを物語っている。こうした現実を直視するところから、私たちは高校生の性の問題を捉えていかなければならない。

高校生の性の問題を考える際にもっとも基本となるべき視点は、生徒の自己決定権を最大限に尊重し、彼らの自己決定能力を多面的に高め、育てることである。「高校生の性」の問題が、高校教育の実践的な課題として本格的に論じられるようになって 30 年ちかい年月が経った。この間に一般的な「性」の把握の仕方には大きな変化があった。その基本的な方向は性の多様性の承認であり、どのように個性的な性を選択するかは各個人の主体的な判断に委ねられるべきであるという見解の拡大であった。既成の価値基準によってあるもの（例えば異性愛）を正常とし、他のもの（例えば同性愛）を異常ときめつけるのは偏見に過ぎない、同性愛者への差別を止め、異性愛者と同等の人権を認めるべきだという見方もひろがっている。こうした変化にもかかわらず、

高等学校の教育現場では、相変わらず、性の問題はタブー視されている。このタブーを打ち破って、生徒の性に関する自己決定権と自己決定能力を高める課題を、実践的に探究する学校づくりを進める必要がある。

## 2 排除の論理の克服

高校教育の場で、生徒の性決定権と決定能力を育てるためには、まず、生徒の性的行為を生徒の発達や成長の過程で生起する教育課題として受け止めることを拒否する思考や態度を克服していかなければならない。「不純異性交遊」（死語になっているとは思えない）という言葉に端的に表現されているように、生徒の性的な関係は非行・問題行動として認識されることが多く、それは高等学校の場からは排除されるべきものとする見解が色濃く残っている。

たとえば、在学中に妊娠し、出産した生徒がいるとすると、ほとんどの場合、彼女は「自主退学」の名のもとに学校を去ることになる。彼女らの問題が、教育の現場で、正面切って論じられることはほとんどない。学級担任をはじめ、かかわった何人かの教師は、確かに苦悩する。しかし、その苦悩が報いられることはほとんどない。

出産した生徒が退学に追いやられていく学校の『論理』は次の2点に集約していくように思われる。まず第一は、「育児と学業の両立は困難であるから、彼女が退学するのはやむを得ない」という考え方である。なるほど、育児と学業の両立は容易ではないことは確かだ。しかし、「困難である」ということと「不可能だ」ということとは同じではない。「困難」ということであれば、生徒は実に多くの、さまざまな困難を抱えている。「学業不振」に悩む生徒は多い。複雑な家庭環境や学費の過重な負担に悩んでいる生徒もいる。アトピー・喘息あるいは「摂食障害」や「抑うつ」などの心身の疾患に苦しんでいる生徒もいる。これらの悩みや苦しみは学業継続を困難にする要因である。また、場合によっては、部活動や学級活動・自主活動と学業の両立が一定の困難を生み出すこともある。しかし、これらの困難はいわば高校生活の中で解決し克服すべき対象であって、これらの困難を理由として生徒が退学を迫られることはない。にもかかわらず、「育児」となるととたんに「困難」は「不可能」と同義になる。同じではない二つのことが同一視されて、出産した生徒は、おためごかしに、学校を去ることを余儀なくされていく。

今ひとつの論理は、「出産した生徒が在学するような学校は、いわば『なんでもあり』の学校だ。こういう学校は社会の現実に容認されず、学校の社会的評価を引き下げる」というものだ。「学校の評判」を優先させて、生徒の人間的な成長・発達を二の次にしていく学校の構造は、今も昔も基本的には変わっていない。

もとより、妊娠や出産は経済的な困難や病気と同列に論ずるべきことではない。後者は、生徒が自らの判断で引き起こしたことでない。妊娠や出産は、たとえそれが予期せぬ出来事であったとしても、何段階もの選択や判断を経過してのことであり、そこに至った責任は多かれ少なかれ生徒自身にある。しかし、生徒の判断や選択に誤りがあったとしても、それだからといって妊

娠や出産の責任は「退学」によって償わなければならないものなのだろうか。またそれで償えるのだろうか。妊娠や出産は、当の生徒の学校生活のみならず、これからの長い人生に大きな困難と負担を課してゆく。その負荷を首尾よく生徒が担っていくために、学校はどのような役割や機能を果たすべきなのか、学校にはそれが問われている。それにもかかわらず、高校生の性行為・妊娠・出産・育児・墮胎などは、ほぼひとしなみに、学校にとっては存在を許されない非行・問題行動として排除されていく。「高校生の性を排除する論理」は高等学校のヒドゥンカリキュラムのなかに今も厳然と生きている。学校や教師が「高校生の性」を道徳主義的に断罪し、学校からそれを排除する姿勢は、学校が担うべき重要な責務を自ら放棄することだといわなければならない。

もう20年近く前のことだが、1年生を担当した私のクラスに麻奈という生徒がいた。彼女は欠席日数の超過で進級できず、留年して私のクラスに配属された。前年度の欠席の主な理由は度重なる家出・無断外泊だった。母親は、麻奈を生んだ後に離婚し、この当時は別の男性と再婚していた。母親が弟を生んで以来、新しい父親との折り合いが悪くなり、他校の男子生徒との交友をたびたび咎められたのが家出の原因になっていたようだ。

新学期が始まってまもなく、彼女はまた家出し、登校しなくなった。母から家出の事実を告げられた日に、私は彼女の自宅に向かった。夕闇が迫るところだったが、母親は電灯もつけずに憔悴した様子でうつむいていた。娘の度重なる家出に苦悩する母の姿が痛々しかった。私はとりあえず母を慰めておきたいと思って、「お母さん、大変ですね。お母さんと麻奈の付き合いは一生ですが、私と彼女とのかかわりは担任している間だけ、せいぜい彼女が在学している間だけのものです。しかし、その間だけでも、私はあなたと一緒に麻奈のことで悩み考えていきたいと思えます。元気を出してください。」という趣旨のことを言った。

数日後、帰宅した麻奈は母から説得されて登校するようになった。私は相談室に麻奈を呼んで家出の状況を尋ねるとともに、我が子が所在不明になったときに母親がどんな気持ちになるものか、自分の近親者の例をひきながら諄々と聞いた。麻奈は時に涙を流しながら黙って私の説教を聞いていた。

半月ほどは登校しつづけたが、麻奈は再び家出した。数日後母親から学校に電話があった。「娘が帰宅したが、どうしても先生に会って話をしておきたいことがある。」という。学校では都合が悪いような口ぶりだったので、喫茶店に向いて話を聞いた。麻奈が妊娠していることがわかった、説得して今日、墮胎させたという。そのとき母は「先日の家庭訪問のときの先生の言葉が忘れられません。昨年の担任は電話で話すたびにあと何日欠席すると留年になるということばかり言われました。なんという大きな違いでしょう。私はあのときの言葉を聞いてそれだけで、娘の学校生活に十分満足しました。もう麻奈が学校を続けられようがそうでなかるうが、どちらでもよくなりました。妊娠した娘が学校を続けられるとは思いますが、先生にだけは本当のことを言っておきたかったです。」といった。私はこの事実は学校にも同僚にも一切話さない決心をした。産婦人科病院に麻奈を見舞うことを約束して別れた。

産院で、私は麻奈に「一人で悩んでいたんだね。お母さんもお父さんも、それに私だって君のことをずいぶん心配していた。一人で悩まずに話してくれたらよかったのに。できるだけきみの力になってあげたいと大勢の人が思っているのだから。」と話しておいた。

数日休養した後、麻奈は再び登校するようになった。ずいぶん明るくなった印象で、学習にも学級活動にもそれなりに努力しているようだった。このまま進級できるようになればいいがと思った。しかし、夏休み前になって、麻奈はこの年三度目の家出をした。今度はすぐには帰宅しなかった。男友達の家にもいなかった。母にはおよその行き先はわかっていたようで、「しばらく様子を見させてください。」ということだった。

欠席日数超過で再び進級が不可能になったころ、麻奈から連絡があった。男友達と二人で会ってほしいという。休日に校外で会って話を聞いた。相手の男性は別の私立高校3年生だという。二人の出会いから今までの様子の概略を語ってくれたうえで、「学校の友達に墮胎のことを話してしまった。きっと他の先生の耳にも入ることになると思う。そうすると先生に大変迷惑をかけることになる。迷惑をかけないためには私が退学するのが一番いいと思った。だけど今までの成り行きから先生は私の退学を認めてくれないだろう。欠席日数オーバーで退学せざるを得ない状況を作ってしまったかったから、家出したのだ」といった。私は彼女が書いた退学届を受け取らざるを得なかった。妊娠や墮胎を容認しない学校の「排除の論理」は、担任である私以上に、麻奈の心の中に強く植え付けられていたのだ。

私と同じような体験を持っている高校教師は決して少なくはない。「生徒の性」の現実をあからさまにすれば、それはその生徒を学校生活から放逐することになる。性体験を持った生徒に学校生活を継続させたいと思ったら、事実は秘匿せざるを得ない。担任は一人で生徒の重い現実を抱え込み、迷いながら手探りの指導を続けなければならない。指導は多くの場合破綻する。そのうえに、それは当の教師に、同僚を裏切っているかのような後ろめたさを感じさせる。「生徒の性」にかかわった教師の体験の多くは担任の心のうちにしまいこまれていて、語り合われることはほとんどなくなるのだ。

「生徒の性」の問題に関するこうした「排除の論理」は今も多くの高校現場で存在しつづけている。この現実を組み替えていかないでは、生徒の自己決定権を保証し、自己決定能力を育てる指導は実現してはいかないであろう。

### 3 高校生の性の現実

高校生の性の現実がどのようなものであるのか、実は、高校教育の現場ではよくわかっていない。あるいは、敢えて積極的に捉えようとしていない。高校教育の現場では、それが学習指導や生活指導にとって何らかの問題になってこない限り「高校生の性」はできるだけ避けてとおりたい問題になっているように思われる。「性」が高校教育にとって問題になるということは、それが教育にとって障害になるという意味であって、生徒の発達や成長の契機としてそれが認識され

ることはほとんどなかったのである。

しかし、すでに述べたように高校生にとって、「性」は日常生活のある主要な側面ともなる、避けてとおることのできない問題である。

徹はある運動部の部長を務めている。学習成績も優秀で、学年の成績順位ではいつも1桁を維持しつづけている。級友からの信望も大変厚い。だが時々心理的に不安定になることがある。中学の時には抑うつ傾向が強くなって、学校を休んだ日も少なくない。いまま時々、部活や学級内での友人関係に「自分としては許せない」ものがあって、気分がひどく落ち込むことがある。そんな彼の様子をいつも気にとめて心遣いを欠かさなかったのが下級生のゆかりだった。いつか二人の関係は深まっていき、性的な関係を持つようになった。月に2度ほどは、徹はゆかりの家に泊まる。彼の母はゆかりの妊娠を心配して、彼が泊まりに行くたびにコンドームを手渡しているという。

みさとの家庭では父母の折り合いが悪く、いさかいが絶えない。いたたまらない気持ちになっていた彼女は高校進学と同時に両親を説き伏せて、学校の近くに下宿した。入学後まもなく彼女は雄一と親しくなった。雄一は英語が得意でひょうきんなほど明るい性格だが、みさとの家庭生活の悩みには真剣に耳を傾けて聞いてくれた。みさとは雄一のややルーズな生活態度が不満だったが、批判すればそれにも素直に従った。雄一はみさとに英語を教えるという口実もあって、彼女の下宿を頻りに訪れるようになった。みさとは雄一とともに過ごす時間がとても貴重に思えるようになっていったが、彼の自宅が遠方なので、必ず8時には帰宅させるようにしていた。けじめのある生活をするのが彼女が下宿生活をするにあたっての母との約束であったし、彼女もそのことの意味を十分に承知していた。こうした関係が2年以上続いたが、最近になって雄一に同級生の新しい女友達ができ、雄一が下宿を訪れることも間遠になり、時にはみさとに見せつけるように女友達と親しげにすることもあった。みさとは今、雄一との関係を続けるには、セックスをして仲を深める以外にないのではないかと深刻に考えている。

性的な関係が現実からの逃避になっている場合も少なくはないが、性の問題に直面している生徒の多くは、単なる性への興味や「遊び半分」でいるのではない。自己自身のありようについて、真剣に考え、自立を求めて苦悩する中で、性の問題も浮かび上がってくる。

アンケート調査や統計的な手法で高校生の性の実情を解明することはもちろん有用性がある。しかし、それだけでは見えてこない、生徒のリアルな生活現実としての性が存在している。それをどう把握するかが重要なのだ。

援助交際、インターネットや携帯電話の「出会い系サイト」にかかわる性の逸脱やそれをきっかけとした事件の続発、性の商品化など、高校生の性をめぐる否定的な現象は後を絶たない。アルバイト先で知り合った何人もの青年と性的関係を結んだ女子高校生がいるとか、フェティシズムのビデオ撮影の勧誘に何の抵抗感もなく応じてしまった高校生がいるとかの話も、時折流れてくる。それぞれが深刻な問題状況であるには違いない。しかし、それらの否定的な現象だけに目をむけていたのでは、高校生の性を人間的な視点で把握し指導することはできない。一方に、

自己の自立を真剣に探究する過程で性の問題に逢着している多くの事件化しない高校生たちがいる。彼らのことを中心に据えた高校生の性の把握を前提にしてこそ、「事件化」する高校生の性の問題もまともに捉えることができるようになるのである。

#### 4 性行為 = 非行論の克服

1970年代には、優れた生活指導の実践者の間にも高校生の性的行為はそのまま非行であるとする考え方があった。本場敬三・田嶋英輔著『女子非行 その瞳輝くまで』（1978年発行）<sup>(注2)</sup>は、生徒の生活現実を真っ正面から見据えて、生徒集団とのかかわりで非行問題の克服に取り組んだ感動的な実践記録である。しかし、この著作の中にも生徒の性行為はその学校生活を破綻させていくものだという見方が存在しつづけている。

田嶋らは3年生の坂野が有職青年小池と性的な関係を含む交際をしていることを知る。田嶋は執拗に、坂野が小池との交際を絶ちきるように求めていく。「学校をとるか、小池をとるか」二者択一が坂野に迫られていく。ここで迫られている坂野の選択は、坂野の主体的な意思による選択だとはいえない。坂野は学校生活も全うしたいし、小池との交際も続けていきたいと考えている。これが坂野の意思であり、選択なのだ。田嶋はこのような選択の余地はないと決め付け、小池との関係の清算と学校生活の継続を坂野に強要していると言わなければならない。田嶋がこのように迫るのは、彼の指導意識の中に、高校生の性的関係は「不純異性交遊」すなわち非行であって、学校生活と異性との性的関係とは両立しないものだという観念があるからではないだろうか。田嶋は「おまえは小池君と交際していると、帰りも遅くなるし、遅刻も多くなる。これまでだって、スカートが長くなったり、容儀が乱れたり、また成績の方もE段階まで落ちてしまっただろう。こんな事では学校へ来る意味がない。学校へ来るということは、ただ来ればいいというものじゃない。学校の方に、からだも頭も心も向いているということなんだ。……いまのおまえは、からだも心も、学校よりは彼のほうに向いている。……そんなことでは、学校はやめるよりほかない。」というのである。

田嶋がこのように迫るのは、課題を鋭く提起することによって坂野にその生活を根底から見直させたいという意図があつたことだと思われる。しかし、ここには、重要な問題点が2つ含まれている。その1つは、「学校へくるといことは、学校の方へ、からだも頭も心も向いていることだ。」という、学校把握・生徒把握の問題である。現実の学校は果たして生徒たちが全生活・全精力を傾けて取り組まなければならないほどの価値や意味を持っているのだろうか。そのような価値や意味を実際には持っていない学校が、あたかもそれを持っているかのようにして生徒に迫り、生徒を既成の学校的な価値のなかに閉じ込めようとしていることこそが、生徒が学校を「支配」と受け止め、そこからの脱却を求めて非行などの問題行動を引き起こす原因となっているのではないだろうか。もちろん、田嶋らが、生徒にとって本当に意味のある学校とは何か、そのような学校をどうしたら作り出し得るのかを自らに問い掛けつつ、生徒とともに懸命になっ

て「価値ある学校」づくりに取り組んでいる姿は、この実践記録から十分に読み取ることができ、田嶋の坂野への指摘は、このような実践への姿勢に支えられて、行われている。

しかし、もう一步振り返ってみると、果たして高校生は本当に全生活・全精力を学校の中に注ぎ込まなければならないのだろうかという疑問が生じてくる。現実には圧倒的に多くの高校生が既成の「学校的な価値」の世界に閉じ込められていて、そこからの逸脱を禁じられ、それへの適応を余儀なくされている。むしろ、高校生は家庭や地域での生活をはじめ、学校の外の世界と多様にかかわっていくべきであって、そこで掴み取ってきた現実の諸問題を解決可能にするちからを高校生にどう培っていくかが、学校の課題にならなければならない。高校生の全人格、全生活は学校生活の中になければならないとする考え方が、むしろ高校生活を硬直化させ、既成の高校の変革を阻んでいるのではないだろうか。

一方で、高校教師は、学校外で発生する生徒の問題行動の解決が学校に求められてくことに辟易としている。生徒に「からだも頭も心も」そのすべてを学校の方に向けよと要求するのは、高校教師が、学校外での生徒の生活を「非行」や「問題行動」の温床であるかのようにとらえているからなのではないだろうか。生徒を学校外の社会の悪影響から隔離し、「非行」や「問題行動」を未然に防ぎたいという思いは教師の中に根強く存在している。「アルバイト」や「宿泊を伴う旅行」が禁止されていたり、許可制になっていたりするのも、こうした校外での生活への危惧があるからであろう。「非行」や「問題行動」を生み出す原因が社会にないとはもちろん言えない。だが、生徒が体験する学校外の世界はそれだけにとどまるわけでは決してない。学校外の生活は、教師の「保護」や「管理」の外にあるだけに、いっそう多くの豊かさや魅力、困難や問題点を持っている。それらの生徒の体験が学校の中に、公然と、豊かに流れ込んできてこそ、学校は生徒にとって真に魅力的で、生きる力を与えてくれるものになっていくのではないだろうか。

教師は、生徒の人間的な自立を目指してその指導を組み立てなければならないとすれば、生徒を全人格的に、全生活的に、トータルに把握するように絶えず努めていかなければならない。生徒は学校内外のさまざまな生活場面で、その生活を楽しんだり、苦悩したりしている。そのような生徒を全一的な生活者として捉え、その生活の各場面での生徒の姿を把握するように努めなければ、生徒の直面している発達課題を正確に捉え、そこに迫っていく指導は成り立たないであろう。しかし、生徒の家庭や地域を含む全生活を教師が把握するのは実際には難しい。必要なことは、生徒をとらえる生徒観の問題として、生徒は教師の手の及ばない学校の外でも、ひとりの人間として生き続けている、一個の独立した生活者だ、という見方をいつもしていることなのだ。

いまひとつの問題は、田嶋らが、高校生の性的な関係を、必然的に、学校生活に必要な生活の規律を崩壊させるものであるかのごとくとらえているということである。確かに、性的な関係を持っている多くの高校生、特に女子高校生が、その関係のゆえに生活を乱だしていくという現象が存在することは否定できない。しかし、この2つに明確な因果関係を立証するのは不可能である。性的な交渉を含む他者への愛が、さまざまな失敗や苦悩を経ながらも、若者や高校生の人生に向き合う姿勢を確かなものにしていくことも決して少なくはない。むしろ、本来の性愛は、自

らの人生と他者の人生とを緊密に結び付けていく営みを通して、若者を人間的な自立へと向かわせていくものなのである。田嶋は坂野に対して、「おまえは今のようふうにして小池君と交際していると、帰りも遅くなるし、遅刻も多くなる。これまでだって、スカートが長くなったり、容儀が乱れたり、また成績の方もE段階まで落ちてしまっただろう。こんな事で本当に小池君と愛し合っているといえるのか。」と迫ることもできたはずである。このような迫りかたは生徒に、性的な関係のありようそのものを、愛するとはどういうことかを問うことである。このような問いかけを成立させるためには、指導する側が性行為 = 非行とする見方を克服していなければならないのである。

坂野は田嶋らの説得を受け入れて、高校を卒業するまで小池と会わないことを約束する。しかし、この坂野の決意は、田嶋の迫った学校生活の継続をとるか小池との交際をとるかという二者択一に従ったものではない。おそらく坂野は、小池とともにいたいという強い欲求をしばらく我慢し、自己の生活を統制しなおす以外に、小池への愛を全うする方法はないと思いつめたのだろう。後に、田嶋は坂野に「おまえは小池君と会って、彼のことが好きになった。誰も、好きになったことが悪いとはいっていない。そのことでおまえが、自分で自分を滅ぼしてはいかんとやっているのだ、おまえが本当に人が好きになったのなら、その愛をしっかりと育てるためにも、おまえがシャンとしなくてははいかん。」と述べているが、この見方こそ坂野が受け入れたものだったのだ。

## 5 自立への道 関係性を組替える認識の形成

吉田和子は、『愛は教えられるか 高校生の [愛と性] を生きる』(1983年発行)<sup>(注3)</sup>のなかで、女子高校生の性に、迷い悩み自ら傷つきながら伴走して、自己自身の人生を再検討せざるを得なくなかった過程を述べている。そのうえで、生理の遅れを妊娠と思い込んだ博子との出会いとかわりを振り返っている。

吉田は授業ノートに走り書きされた詩から博子が性の問題で悩んでいることを察知する。放課後の対話で、博子は生理が遅れていて、妊娠していると思うと事実を打ち明ける。妊娠するまでの経過を問いただした吉田は、博子の「妊娠までした相手との人間関係の希薄さ」を見て取っていく。吉田は、「中絶するにしろ、出産するにしろ、……彼女にとっていまもっとも必要なことは、妊娠という事実、その事実の当事者である自分、そして相手との関係を、真正面から見つめなおすこと」であり、「そうするなかで、現実はどう対処するか、判断し、選択する“主体”が育ってくるだろう」と見通す。吉田は博子に「自分を見つめるノート」を書くよう求めるとともに、「彼と彼女の閉じられた二人だけの世界から彼女を解き放ち、「現実」に立脚し、現実を乗り越え、豊かな人間関係 = 生活を作り出していくために、多くの人の生活経験、行動、感性、考え方をくぐりぬけさせること」が大切だと考えて、『生まれなかった子への手紙』や『愛と性の十字路』などの本を読むように指示していく。博子は吉田の要求にこたえて、自分と彼との関係を



見つめなおすノートを書き、迷い悩みながら、自分のおなかの中にいる子への責任のとり方を模索していく。そうした矢先に、生理が始まり、妊娠が誤信であったことがわかる。しかし、ここで吉田の指導は終わらない。「博子は、いわば精神的妊娠経験を経るなかで、生命をいつくしみ、はぐくもうとする女性の性に目をそそぎはじめている。この事実をテコに、はじめに考えた指導をつらぬかねば」と考えるのである。吉田は石川達三らの小説を読むように博子に勧め、「編集の仕事に生きがいを燃やしている女性、高校時代つっぱり、博子以上に『愛と性』の泥沼にはまり込みながら、卒業後、二児の母として身を粉にして働きながらおおらかに生きている卒業生、地域の地道な平和運動に取り組んでいる戦争未亡人」らに引きあわせていく。博子は、彼との間に『ドント・セックス宣言』を行い、『生む性』としての自分の女性性を深く自覚するようになり、やがて、「いわば“フィーリングの中の愛”を解消することを決意」していくのである。

吉田のこの実践は、性愛を自立への契機とする指導を展望するうえで、非常に示唆に富んでいる。吉田の指導の重要な特徴は、生徒の生活や情感の現実にしっかり立脚しながら、それらを捉えなおすことのできる知的な認識を形成しようとしているところにある。生徒の自己認識や他者認識は、教師が「上から」教え込むことによって形成されていくものではない。生徒は自らの体験と生活事実を見つめなおすことを通して、また、生活の現実に変革的に迫ることによって、それを成し遂げていく。しかし、そのときに、狭い自分の体験の枠の中に閉じこもっていたのでは認識は切り開かれていかない。他者の体験から誠実に学ぶ姿勢とともに、自己や他者の生活体験を客観化できる概念の形成が必要になるのだ。博子はポーヴォアールの『第2の性』やフロムの『愛するということ』などに導かれて、「自立した女になりたい」と願いながら、なお「女として生まれてきた……私にしかできないこと、それは愛している人との子どもを宿すことです。同じくらい、男と女が愛したとしても、子どもを宿すのは、かならず女である。あくまでも、私にしかできないことです。」と考えるようになっていく。さらに彼女は、「生きるということ、それは相手の心の中に入り込むことだと思います。」という認識に到達していく。これらは、一方では生活現実の把握のしなおしから生まれた認識であると同時に、書物などから得られた知識や概念によって導かれた認識でもあるのだ。このような認識の形成があつてこそ、博子は父親をはじめとする家族や「彼」との関係性を主体的に組替えていくことができたのだと思う。

## 6 ホームルームの人間関係を指導する

吉田が担任を離れたところから博子の指導に臨んだのにたいして、藤田幸子は、ホームルームの友達関係を中心にすえて、女子高校生の性の問題に迫ろうとした。『さびしがりやの女の子たちの性と愛』(1992年発行)<sup>(注4)</sup>の「Part」は、藤田が何人もの「性の深淵」に落ち込んだ生徒と付き合い、彼女らの指導に呻吟した末に到達した「私の主戦場を学校に定めて、クラスの仲間関係の指導に焦点を当て、そのなかで性と愛についても考えてみよう」という結論に基づいて接した万里とのかかわりを中心に論述されている。藤田は過去の指導を振り返って、生徒の「恋人

との関係に私が直接切り込んでいくと、いつのまにか二人の関係まで支配しかねない」と考え、いままでそこに注ぎ込んできた「私のエネルギーを、クラスの中の間人間関係を育てることに注いでみようと思いました。クラスの仲間関係の中で、その生徒の人間観が豊かになることは、必ずや恋人への関係にも影響するに違いないと思えました。」と述べている。

万里は、高校1年生の5月に、妊娠していることが明らかになる。万里とその級友からこの事実を告げられたときの藤田の指導原則は、生むか生まないかは「万里さん自身が決めること。」であった。娘の妊娠を知った万里の母親は逆上して、「すぐおろさせます」という。藤田は母親をなだめて、「私たちはいろいろな意見を言ってもかまわないし、助けてあげなきゃいけないんですけど、産むか産まないかは、万里さん自身で決めることが大切なんじゃないでしょうか。私は以前に何度も中絶を繰り返す生徒に出会って、本人が自分で決めることが本当に大切なことなのだと思っています。」と説得する。万里は思い悩んだ末に、中絶を決める。担任と級友に支えられて、妊娠・中絶の危機を乗り越えた万里は、班長に立候補するなど、積極的に仲間とかかわりあうなかで徐々に人間的な成長を遂げていく。

しかし、この筋道は決して単調に、直線的に進むわけではない。万里が最初に妊娠を打ち明けた美紀と友美はしばらくすると仲たがいに、美紀は退学してゆく。友美も万里に深くかかわっていく。藤田への反感を募らせ、万里との関係も悪化する。些細な校則違反を問われて友美らのグループは親が学校に呼び出されることになった。万里の妊娠や中絶には特別な処分もなかったのに、もっと軽微な校則違反で保護者呼び出しになった友美らは、担任や学校の指導の不公平を親に訴える。学年主任との話し合いの場で、友美らの母親は「うちの子が注意を受けたわけはわかりましたが、ある生徒さんのことで疑問があるのですが……」と万里のことを話し出した。その場は学年主任の気転で切り抜けられたが、こうした友美らとの関係は万里の立場を不安定なものにしてゆく。この場面で藤田は「私の学校では、大変に規律が厳しく、特に異性交遊については否定的で、異性からんだ問題行動には、厳しすぎるとも思われる処分が行われていました。ですから、中絶の事実が明るみに出れば、不純異性交遊として処分されるのは目に見えていました。私も、万里が自分で打ち明けた数人の生徒も、こうした処分から万里を守るために、知っている者以外には中絶の事実をひた隠しにしてきたのです。」と述べている。異性交遊を「犯罪視」する学校の姿勢が、生徒の人間的な成長や自立を求める指導を困難にしてゆく状況がここでも読み取れるのである。

万里はその後も、親しくなった好子と一緒に家出を繰り返したり、学校を止めようと思ったりする。藤田はそうした万里とかかわりながら、ともすれば自分の価値観で彼女の行動を規制したくなる自分を抑えて、重要な場面での決断を万里自身に任せるよう努めてゆく。万里はこうした藤田の粘り強い指導姿勢を背景に、級友とのかかわりを深めながらやがて高校を卒業してゆくのである。

藤田の実践の基調には、生徒が人間的に自立していく過程では、「支配の構造」から自らを解放して、豊かな人間関係を構築していくことが不可欠だという視点がある。「支配の構造」は地

域社会にも家庭にも学校にもある。それらが、教師にも生徒にも反映して、教師と生徒・生徒相互間にも支配し支配される関係を生み出す。生徒が取り結ぶ性的な関係のなかにも支配の構造が生み出されていく。このような支配の連鎖をどこで断ち切ることができるのだろうか。藤田はその方法を「クラスの人間関係」を指導するところに見出していく。そして藤田は、「支配の連鎖」を断ち切る原点を自らのうちにある「支配の構造」の克服にも求めなければならなくなる。藤田がかつて生徒の性関係から生まれる問題を自ら引き受けて解決しようとした指導の形態は、たとえ善意から出発していたとしても、結局は性における生徒の自己決定権を否定し、生徒の自立を妨げ、生徒を支配することになってしまう。この構造の自覚が、「私は、万里の性と愛を、クラスの人間関係を指導することを通じて指導したいと思ってきました」という視点に導いていく。しかし、このような指導方針を守ろうとするなかにも、藤田の「生徒支配」は顔をのぞかせてしまう。万里が好子とともに退学しようとしたとき、藤田は「止めさせない」と断言して二人に生き方の変更を迫る。藤田は万里たちの2度目の家出に直面し、他の生徒たちが万里たちにかかわることを要請していく中で、この迫り方が生徒への支配だと気づく。それとともに、万里の中に、好子を独り占めし、彼女を支配したい欲求が存在していることにも気づく。藤田は自己と生徒の中にある「支配」の克服を目指し、学校を続けるか否かの決定権を生徒自身にゆだねる指導に転換していく。この指導転換こそが万里の学校生活継続の力を引き出していった。社会や学校や家庭の中に存在する「外からの支配」を克服するためには、自己自身のうちに存在する「内なる支配」を明るみに出し、生徒の自己決定権を尊重して自己決定能力を高め、「支配」と闘う力を自己とともに培っていかなければならないのである。

## 7 自己決定権と自己決定能力

高校生の性をどのように捉えどのように指導すべきなのか、私たちはまだ、この問に対する決定的な答えを持ってはいない。ましてや指導の確定的なマニュアルがあるわけではない。私たちは生徒の性の問題に直面したとき、手探りで対処の方法を考えざるを得ない。しかし、私たちは、現実に生じてくる生徒の性の問題を避けておることはできないし、高校生の性を学校から排除することも許されない。私たちにできることは、生徒が直面する性の問題を道徳主義的に断罪せず、あるがままの姿でまず受け止めていくことだ。そこから私たちは高校生の性を考えていかざるを得ないのだ。

高校生の性を考えるうえで、最も大切なことは、生徒の性に関する自己決定権を尊重するということだと思う。性的な関係をもつか持たないか、性交の時に避妊するかしないか、妊娠したときに中絶するのか生むのか、これらの問題は、学校や教師が禁止したり管理したり統制したりして決定できるものではない。結局は生徒の主體的な判断に委ねていかざるを得ないのだ。生徒の自己決定権の行使や主體的な判断・選択は時には大きな誤りを含むことがあるだろう。しかし、そのような過ちの体験無しに生徒は自らの判断能力を高め、人格的な自立を達成して行くことは

できないにちがいない。それにもかかわらず、これらの決定権を生徒から奪うとすれば、それは生徒の人間性を否定することであり、生徒の肉体的な自立を損なうことなのだ。

高校生の性には陥穽が多い。望まない妊娠や中絶や出産、性感染症にかかる危険性、性にのめり込むことから引き起こされるさまざまな生活崩壊、性暴力、売春や買春、性の商品化の犠牲など、否定的な現象がそれには随伴しがちだ。これらの問題の防止に力を尽くさなければならないのは当然のことだが、だからといって、高校生の性の問題は、禁止したり管理したり統制したりすることによって解決できるものではない。学校による禁止や管理は、かえって、生徒の性的な関心や関係を、隠微で不健康なものへと歪めていく。学校がこれらの問題に対して退学処分を含むような厳しい姿勢で禁止したとしたら、これらの問題に直面して本当の意味での指導や相談を必要としている生徒からその機会を奪ってってしまうことになる。問題は解決されるどころか、生徒を一層深い生活崩壊へと突き落としていくことになりかねない。生徒の自己決定権を尊重しながら、生徒が、直面している問題を率直に教師に語り出し、相談したり、助言や忠告を受けることができるようにしてこそ、問題解決の方向が見えてくるのだ。

生徒の性の自己決定権を尊重するためには、生徒のうちに日常的に、性に関する自己決定能力を高める指導を行っていかなければならない。性に関する自己決定能力を育てる指導は多面的でなければならない。性に関する正確で科学的な知識が生徒には与えられなければならないが、しかしそれだけでは十分ではない。性的な関係を結ぶということは、相手の人生を自らの人生と深く結びつけることであり、それを自らのものとして主体的に引き受けていくことである。この視点にたった人間としての相互尊重の精神の形成が欠かせない。性に関する自己決定能力はヒューマニズムを前提としなければならないのだ。このことは「愛する能力」を育てることだともいえよう。ヒューマニズムや「愛する能力」は知識として与えることによってだけでは育たない。生徒の現実の生活を介して、実践的に、行動的に、学び取らせていかなければならないのだ。

「高校生の性」を指導することは困難に満ちている。しかし、それは同時に、魅力にとんだ可能性の探求でもある。吉田や藤田の実践が物語っているように、「生徒の性」の現実深くかかわっていかなくてはならないほど、私たち自身の生き方が鋭く問い直されてくる。そのような指導に私たちは勇気をもって取り掛かっていかなければならないのだと思う。

(注1) 財団法人 日本性教育協会 編 『若者の性白書 第五回 青少年の性行動全国調査報告』 小学館 2001年5月 発行

(注2) 本場敬三 田嶋英輔 著 『考える高校生の本11 女子非行 その瞳 輝くまで』 高校生文化研究会 1978年10月 発行

(注3) 吉田和子 著 『愛は教えられるか 高校生の[愛と性]を生きる』 高校生文化研究会 1983年10月 発行

(注4) 藤田幸子 著 『さびしがりの女の子たちの 性と愛』 学事出版 1992年4月 発行